

『えつちやんのせんそう』

岸川悦子・作 より

《ほらふきえつちやん》

今から六十数年ほど前、えつちゃんは満州のハルビンに住んでいました。そのころ日本は戦争をしていました。小さな国を大きくしようと戦争をしていたのです。そして満州もありやりに日本のものに、してしまったのです。

たくさんの日本人が海をこえて満州にうつり住むようになりました。えつちゃんのお父さんも、そのひとりでした。お父さんは水道技師として満州のあちこちに水道をひく仕事をしていました。

えつちゃんはハルビンの花園小学校の一年生です。そこにはいつもなかよしの、となりのうちの、たつちんがいました。二人はいつもいつしょに登校します。

花園小学校一年生の、えつちゃんたちのクラスの先生は上原先生という人です。先生はある日黒板にこう書きました。【戦地の兵隊さんに、お手紙を書きましょう】えつちゃんは

手紙に、わたしはお母さんになつたら子どもを二十人うんで、お国のためにささげます。といったものを書きました。その手紙は先生にほめられて、みんなの前で読まれました。でもみんなからには、そんなにうめるはずがない

じやないかと言われました。そんなことを、ほらふきえつちやんと、よぶようになりました。でもえつちゃんは負けずにこういいます、「えつちゃんはお母さんになるんだから兵隊さんだつ

て、校長先生だつて、みんなお母さんから生まれたんだから、だから、えつちゃんがいちばんえらいんだあ！」

えつちゃんと、たつちんは毎朝学校で「日本が勝ちますように」おいのりをさせられていきました。えつちゃんは戦争が日本がどういうことになつてかたつたのです。お父さんは、えつちゃんにおかんてとうぜん小さいのでまだよく

《日本が負けた》

えつちゃんと、たつちんは毎朝学校で「日本が勝ちますように」おいのりをさせられていきました。えつちゃんは戦争が日本がどういうふうに変わるかわからぬので、えつちゃんはお母さんに外に出ではいけないと言われました。

だけどえつちゃんは、たつちんとあそびたくて外に出たくてしかたなかつたのです。お父さんは、えつちゃんにおちついたら日本に帰ろうと言いました

わかつていません。たつちんと楽しくある日えつちゃんは家に帰つたらお父さんとお母さん、お兄ちゃんが、とてもかなしい、かおをしていました。

お父さんはえつちゃんに日本は戦争に負けたんだよとおしえてくれました。しか

えつちゃんは日本が負けてもいつもど同じ日がくると思つていました。しか

し日本が負けたということは、えつちゃんの今までの生活を変えてしまうこ

とでした。

もともと満州は中国人のものでした。それを日本がむりやりとつてしまつたのです。しかし日本が負けたので中国人がどういうふうに変わるかわらないので、えつちゃんはお母さんに外に出ではいけないと言われました。

たつちんはいつてしましました。

《日本が負けた》

えつちゃんと、たつちんは毎朝学校で「日本が勝ちますように」おいのりをさせられていきました。えつちゃんは戦争が日本がどういうことになつてかたつたのです。お父さんは、えつちゃんにおかんてとうぜん小さいのでまだよく

かたつたのです。その後お父さんがシベリアにつれていかれたことがわかれました。日本人をつかまるとお金金をあげるとソビエト軍隊がおふれを出したのです。お父さんはそれでつかまつてしまつたのです。

シベリアは北の、ソビエトの土地です。シベリアにつれていかれた日本人は、こおりつくすような寒さの中で、死ぬまで、はたらかされるといううわさです。えつちゃんは、からだ全体が、ふかい穴の中に、どんどん落ちていくような気もちになりました。「お父さんきつと、帰つてきてね」えつちゃんは小さな手をあわせていつしょうけんめい、いのりました。

えつちゃんたちは今まで住んでいた家を出されてべつのところに住むことになりました。しかしお父さんのいな

いでの生活は、苦しくなるばかりでした。そこでえつちゃんは、あめをちゃんと売る事ができるのか、そしてお父さんや、たつちんにふたたび会うことができるのでしょうか？

はたして、えつちゃんは、あめをちゃんと売る事ができるのか、そしてお父さんや、たつちんにふたたび会うことができるのでしょうか？

つづきはこの本をぜひ読んでみてください。

日本には四さいのころにいちどだけ、おばあちゃんがいます。えつちゃんはおばあちゃんが大好きでした。だから日本に帰れることがとてもうれしくなりました。そのときハルビンにソビエトの軍隊がやってきました。ダダーダダ！という銃声といつしょにえつちゃんたちはふるえてテーブルの下にうずくまりました。

《お父さんとはなればなれ》

えつちゃんたち家族は外にも出られないでの買い物にいけなくなつていきました。地下室にためておいた食べもの、のこり少なくなりました。お米のういてる、おかゆをすすつて、なんくなりました。家の空気が、こおりついたように、つめたくなつていくのが、えつちゃんにもわかりました。お父さんはなんとかしようと思い、仕事をさがしてこようと出かけました。えつちゃんに、だいじょうぶだよと言いました。

